
とある科学の超越移動《オーバーポイント》

黒炉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の超越移動^{オーバーポイント}

【Nコード】

N4728Y

【作者名】

黒炉

【あらすじ】

柵川中学1年D組に転入してきた仮初京哉^{かりそめきょうや}。データ皆無の京哉は身体検査を受けるが、その結果は……え！？レベル5！？突如現れた8人目のLEVEL5。あ、なんだ、第八位か……は？原石？何それ食えんの？暗部組織アイテムに目をつけられながらも、俺は普通に生活してみせる！フラグ相手随時募集中！

転校、身体検査へシステムスキャン（前書き）

どうも、黒炉です。

このたびは、閲覧ありがとうございます。

他の小説と同時進行で行きますので、不定期更新になりますが宜しくお願いします。

転校、身体検査へシステムスキャン

学園都市。人口230万人の大都市。その8割が学生という学生の街。

その学園都市にある一つの中学、柵川中学に一人の転入生がやってきた。

「彼が今日から1年D組に転入する狩初京哉君だ」

待合室で、教師が一人の少女に一人の少年を紹介する。

「宜しく願います」

「おう。宜しく」

少女の名は初春飾利。第177支部所属の「風紀委員」。

少年の名は狩初京哉。ついこの間学園都市に来たばかりの、能力開発を受けて間もない少年。

「あの、狩初君の能力はなんなんですか？」

「うーん、知らね。無能力者とか言われたけど」

この学園都市では超能力の研究が日夜行われている。

学生たちは能力開発を受け、空間移動レポートや精神感応テレバスといった超能力を身につける。

これらは大きく、

無能力者 レベル0 -

低能力者 レベル1

異能力者 レベル2

強能力者 レベル3

大能力者 レベル4

超能力者 レベル5

の6段階に分けられる。

「レベル0ですか？」

「詳しいことは分からない。今から身体検査システムスキャンをする」

臨時で行われることになった京哉の為の身体検査システムスキャン。学園都市としては、能力が分からない学生がいるのはあまり好ましくない。学園都市の人間の能力は、すべて「書庫バンク」と呼ばれるデータベースに保管される。京哉の能力も、同じように記録されるのだ。

「それでは運動場へ移動してくれ」

「はいはい」と

軽い足取りで運動場へ向かう京哉。

研究所からの報告では、一応は「空間移動系の能力者」ではあるらしい。

本人は何も考えてはいなかったが。

「あ~~~~結構固まってるな」

余裕綽々といった感じで伸びをする京哉。校舎からは他の生徒が顔を出していた。

転入生がいきなり能力を見せてくれるというのだ。気にならないものはいないだろう。

「君は“原石”なのかい？」

寄ってきた教師が聞きなれない単語を口にす。

「ゲンセキ？何それ？食えんの？」

「……原石とは、学園都市の能力開発を受ける前から超能力を行使できる人間のことだ」

「あー、なるほど。じゃあ俺は原石っすね。自分の身体も飛ばせませよ」

「既にレベル4は確定か」

空間移動系能力者は自分の身体を飛ばせるようになった時点でレベル4認定される。

まず京哉の前におかれたのは100kgほどの石の塊。

「コレを可能な限り遠くまで飛ばすんだ」

「コレを？」

「出来ないか？」

京哉は首を横に振り、石に触れる。

その途端、石はヒュンと音を立てて消えた。

「…………どこに飛ばした？」

「えーと、5kmくらい先に」

「なんだと？」

「もっと重いものでも良いですよ。そのクレーン車とか」

そう言うと京哉はクレーン車に触れ、能力を行使する。

ヒュンと音を立ててクレーン車は消える。

そんなことを延々繰り返し、京哉の学園都市生活一日目は終わりを迎えた。

「…………あれ！？俺これしかしてないんだけど！？」

結果通知：狩初京哉（空間移動能力者）
テレポーター

最大飛距離：5893・349m

最大質量：47938・6kg

判定：LEVEL5（第八位）

……あれ？レベル5ですか？

こうして京哉の騒がしい学園都市生活は幕を開けた。

解説、身分証明へプロフィール〈前書き〉

アポリオンさん、感想有難う御座いました！

今回は、オリキャラ『狩初京哉』のプロフィールです。

解説、身分証明へプロフィール

名前：狩初京哉 かりそめきょうや

年齢：13歳

所属：柵川中学1年D組

身長：153cm

体重：39kg

容姿：黒髪を少し伸ばしている。中性的な顔立ちだが女性と間違えられることは少ない。

性格：基本的にひょうひょうとした軽い性格。友達思いでもあるのだが、学園都市の外では『原石』としての能力が災いしてほとんど

友達が出来なかった。自分とかかわりの無い人間に対しても冷酷である。子供が大好きで、性別問わず性格が激変する。知らない子供でも気がつけば守っちゃったりする。子供扱いされるのが大嫌いで、『ガキ』『チビ』などといった単語に敏感。必要があれば戸惑うことなく人を殺す。

能力：空間移動系の最高峰『オーバーポイント超越移動』。レベルは5。順位は第八位。

ナンバーセブンに並ぶ世界最大級の原石。

移動させたい物体に手を触れなければ移動できないなどの点は白井黒子の『テレポルト空間移動』と同じ。

異なる点は、物体の移動に1次元「ベクトル」を用いることが無い点。

1次元を算出しなくても物体の移動を可能とすることにより、一方通行のベクトル反射を無視して攻撃することも可能。

どういう原理で能力を発動させているかは不明。削板軍覇そぎいたくんは以上に自身の能力を理解しておらず、『とりあえず動かそうと思えば動かせる』程度。

一度に複数の物体を動かすことも可能。

また、自身の身体に触れてさえいれば、物体でなくとも移動させることが可能（電撃の槍や超電磁砲、原子崩しなど）だが、触れたと単に大ダメージになるものは結局移動させることが出来ない。

とにかくすべてにおいて異常な能力で、直接能力を使用することによる測定などでないとセンサーに引っかかるから無能力者認定レベル0を受けてしまうなど、分からないことが多すぎる能力。

一度に飛ばせる物体の最大飛距離は5893.349m、最大質量は47938.6kg

と、現在はこんな感じですよ。
アドバイス等ありましたら宜しくお願いします。

出会い、超電磁砲ヘレールガン〈前書き〉

感想、フラグ相手の投票をしてくださった皆様ありがとうございました！

現在の票は、

黒子 2票

絹旗 2票

初春 1票

佐天 1票

フレンド 1票

となっております。

黒子&絹旗がトップです。

まだまだ投票は受け付けておりますので、よろしくお願いいたします。

出会い、超電磁砲へレールガン

「超電磁砲？」
レールガン

「はい、この学園都市に8人しかいないレベル5の第3位、御坂美琴さんですよ！」

まるで自分のことのように誇らしげに胸を張りながら言う少女は初春飾利。シャッジメント風紀委員第177支部に所属する風紀委員だ。

「俺は第3位より0930事件のほづが興味あるけどなー」

と、かつたるそつに返す少年は狩初京哉。

ついこの前学園都市外からやってきた8人目にして第8位のレベル5。

「どうしてですか！？確かに分からないことだらけの事件も興味はありますけど！」

「そこで興奮するなよ……。まあ他のレベル5がどんな奴なのかは気になるけどな」

0930事件には、不可解な点がたくさんあった。外部の侵入者が犯人だとか、見たこともない天使が現れたとか、次々と人が倒れたとか、到底真実とは思えない様々な噂が飛び交っているのだ。

「まーまー、落ち着きなよ初春」

そう初春に話しかけてくるのは佐天涙子。

京哉、初春のクラスメートだ。

「なー、コイツいつもこんな感じなのか？」

「いや、いつもはもつと落ち着いてるっていうか……」

「……………御坂つてすげえな」

同性すら虜にする第3位にちょっとびっくりしてみる京哉。

初春によれば、『超電磁砲』とは最強の電気使用エレクトロマスター、コインをローレ
ンツ力で加速させ打ち出す『超電磁砲』から『電撃の槍』『砂鉄剣』
までとにかく応用性が半端ないらしい。

(思いつきりチートみたいな能力だな)

自分はいくまで物体の移動しかできないのに、と京哉は心の中で不
満を呟いた。

「で、その第3位がどうかしたのか？」

「今日も会う約束なんですよ！御坂さんと！」

「で、どうしてそれを俺に言うのかな!？」

初春のあまりのテンションの高さにつつとおしさを隠すことさえま
まならなくなってきた京哉である。

「いいじゃないですか。レベル5同士、親睦を深めても」

「別にいいってのに……………」

「ああなつた初春は止まらないから」

目を輝かせる初春を見る京哉と佐天の目が温かいことに、初春は気付かない。

とある駅前のお茶店。

京哉はガラスに顔をくっつけ、初春と佐天は目をそらしていた。

「……………なんじゃありゃあ」

「あー、なんていうか……………」

「あれが御坂さん……………です……………」

京哉の視線の先には肩まで届く短めの茶髪にヘアピンを付けている少女と、同じく茶髪ツインテールの少女が店内で大胆に抱き合っている姿があった。

『……………!??く、黒子!離れなさい!見られてる!見られてるから!』

『お姉様、見られてるくらいで御騒ぎにならないでほしいですの〜』

「……………（どっちかわかんないけど）あれが第3位……………？」

「残念ながら……………」

『初春さんに佐天さん！？聞こえてるから!!』

来たのはやはり間違いだっただか、と京哉は肩を落とした。

「で、そちらの殿方は誰ですの？」

「あ、ども、狩初京哉です」

「私は御坂美琴。よろしく」

「白井黒子ですの。よろしくお願いいたしますわ」

「よ、よろしくです」

“原石”という特殊能力のせいで今まで他人との関わりがほとんどなかった京哉は緊張気味に自己紹介をする。

「緊張しなくてもいいわよ。それよりなんか頼みたいんだけど」

「黒子はお姉様を注文したいですの」

「アンタは黙ってなさい」

変態がいる……

学園都市の恐ろしさを味わった京哉である。

「ふい、ふいふあいふえふふお（い、痛いですの）」

「アンタが余計なこと言うからでしょ」

黒子のほっぺをぐいぐい引っ張る美琴。

「なあ初春？この人たちはいつもこんな感じなのか？」

「まあ大抵は……」

「レベル5ってこう、もっとカッコいい人だと思ってたけどなあ……」

京哉の中のレベル5のイメージが音速で崩れていく。

「勘違いしないでね！おかしいのは黒子^{コイツ}だから！」

「はあ……」

と言われても……とため息をつくしかない京哉。

「本当にお姉様は容赦がありませんの……で、京谷くんは初春とはどういう御関係で？」

「きよ、京谷くんですか？」

「ええ……だって、見るからに小学生じゃありませんの」

黒子はNGワードを放った。

「……………だれが」

「「「「「？」「「「「」

ブルブルと震えだす京哉と、それを不思議そうに覗き込む4人。

「だれが世界最小幼稚園児だあ—————！！」

「そ、そこまで言ってますんの！？？」

どごそのチビ錬金術師のようなシャウトが響く。

「とまあ普段ならこのまま大気圏までぶっ飛ばしてる所なんですけど」

「い、いま怒ったのはなんだったの……」

「さ、さあ……」

が、普段通りに戻った京哉を見て美琴と佐天は顔を引きつらせる。

「は、話を戻しますね。白井さんと御坂さんは、オーバーポイント超越移動って知ってますか？」

「勿論ですの。8人目のレベル5、空間移動系能力者の頂点、1次元の算出を行わず物体を移動させる驚異の能力者、だったと思いますの」

「その超越移動がどうかしたの？」

「その超越移動が、この狩初京哉君なんですよ！」

「………は？」

美琴と黒子の目が点になる。

それも当然だろう。突如現れた8人目のレベル5が目の前にいて、ソイツは未知の能力を使って、見た目小学生なのだから。

「だれが小学生だコラ」

訂正。ちよつと小柄な中学生。

「？ 誰と話してますの？」

「あ、いや、なんでもないですよ。ははは……」

「それで初春さん。その子が超越移動って話、本当なの？」

「ホントですよ！この目で見たんですから！」

「もー凄かったんですよ！？こんんな大きなクレーン車を、簡単に移動させちゃったんですから！」

「いやー、それほどでもありますけどー」

ここぞとばかりに京哉を褒めまくる初春と佐天。そして顔を赤くする京哉。

しかし京哉を見る黒子の目は細い。

「京谷k……狩初君は、一体どうやって物体を移動させてるんですの？」

「はい？」

黒子は真剣な顔つきで自分の疑念をぶつけるが簡単に返されてしまふ。

「ですから、通常の空間移動系能力者は1次元「ベクトル」を用いて移動していて、貴方は1次元の特殊演算を行っていない。なら貴方はどうやって物体を移動させているのか、教えてほしいんです」

同じ空間移動系能力者として、一体どういう原理で超越移動が発動しているのか。
テレポーター

単純な興味だった。

だが指摘されてみれば、黒子をよく知る美琴や初春にとっては気に

なる内容でもある。

佐天は何が何だか分からないという顔をしているが。

「あー、そういうこと。えっとね……」

少し悩んだ後、京哉が出した結論は

「よくわかんね」

だった。

「いや、『わかんね』な訳ありませんの。空間移動は他の能力と比べても行う演算による負荷が大きいのは証明されて……」

「だから難しい話はよく分ないけど、とにかく『動け!』って思ったら動かさんの」

「なんてアバウトな……」

「それでよく物体の移動なんてできますね……」

「それはちよつと白井さんが傷ついちゃう気が……」

「うう……ありえませんが……こんな何も分かってない奴が黒子より格上だなんて……」

「え？何？俺なんかおかしなこと言いました？」

美琴、初春、佐天は京哉のまさかの発言に呆れ、黒子は空間移動系能力者としてのプライドを傷つけられたのか、その場で体育座りに

なっ
てし
まっ
す。

強盗、蛋白爆破へプロテインボンバー

狩初京哉、御坂美琴、白井黒子、初春飾利、佐天涙子も5人は手を頭につけていた。

なぜこうなったかという強盗に遭遇したからである。

「……めんどくさいな。あんなのさっさと倒しちゃえばいいじゃないですか。こっちにやレベル5が二人もいるんスからあ」

「だ、ダメですよ。人質が取られてるのに！」

京谷はさっさと倒して終わらせるべきだというが、初春は人質に危害が及ぶことを危惧して京谷を引き留める。

「初春の言うとおりですの。ここは様子を見るべきだと……」

「もーめんどくさいじゃんよー！別にいいじゃんよー！たおしちゃえばー！」

どこかの巨乳警備員のような口調で駄々をこね始める京谷。見た目小学生なだけに、違和感がまったくない。

「アンタね、人質が取られてるって分かってる？」

「分かってますよ？それが？別にアレは俺には関係ないし、どうなっても関係ないし」

「……ッ！ アンタねえ！」

美琴が京谷の胸倉を掴み上げる。

「しょうがないじゃないですか。俺は知らない人間のために死ぬなんてまっぴらゴメンですから」

「いい加減にしなさいよアンタ！さっきから聞いてれば……！」

「うるせえぞ！！コイツを吹っ飛ばされたくなかったら黙ってる！！」

レベル5同士が本気で鬨りあおうとしているところへ強盗が人質の首を絞めて黙らせる。

美琴は舌打ちしながら京谷を元の体勢に戻るが、京谷はどちらでもいいという顔をしているだけだ。

「分かってねえよつだから教えてやるぞ！！俺は触れた蛋白質を爆発させる能力……蛋白質爆破を持ってんだぞ！俺が触れただけで、お前らは簡単に消し飛ぶってことを忘れるな！！」

強盗の男が大声で自分の能力を豪語する。

「……なあ、つまり人質を傷つければアイツをぶっ倒してもいいんだな？」

「え？」

京谷は言うつと同時にまず左右に座っていた初春と佐天の肩に触れる。ヒュンツと音とともに、二人が消え、さらにそのまま美琴と黒子の肩に触れ、二人を店の外に飛ばす。

「さて……」

京谷は両腰に手を当ててあたりを見回す。
店内にいる人間は人質さん含めても数人。

「……いけるな」

京谷はまず自分の体を犯人の真後ろに移動させる。
テレポート
そして人質に肩に触れ、

「まず一人目」

店外へ移動させる。

「んな……ッ!？」

「よっと」

そのままの体勢から犯人のがら空きになった懐に一発パンチをお見舞いしてやる。

中学生程度の腕力でも、まったく無警戒の腹はキツイ。

相手が体勢を崩しているうちに残っている客もすべて店外へ移動させる。

犯人がなんとか立ち上がれるようになったころには、店の中には京谷と犯人しかいなかった。

「このガキ……！
テレポーター空間移動系能力者か……！」

「そ。運がないねアンタ。どういいうつもりか知らないけど、一大決心して狙った店にいるのが超能力者。
レベル5運がないってか不幸ってか」

「レ、レベル5だと……!?まさか、
オバーポイント超越移動か……!？」

京谷は100万ドルの笑顔で

「そゆこと。運のない強盗さん」

姿を消した。

「……！？ 逃げやがっ……がっ！？」

「んな訳ねえじゃん。せつかくチカラを試す相手ができただ。いろいろ実験させてもらっぜ」

相手の背後に移動し、後ろから足払いをかけて倒し、上から覗き込む。

京谷はそのまま厨房まで歩いていく。

「ふむふむ……。こんなのいいかも」

そこで何かを吟味したかと思うと……手に持っていたフォークをどこかへ移動させた。

「があああああああああああああ！？」

同時に強盗犯の悲鳴が響く。

強盗の左腕を、フォークが貫通していた。

「痛いだろ？ま、アンタも高くてせいぜい大能力者^{レベル4}なんだろうしさ、ただのレベル4の強盗^{レベル5}如きが、超能力者に勝てるわけないじゃん」

痛みで聞こえてないかな？と言いながらさらに数本のフォークやナイフを手取る。

「……………!!」
「よっと」

ヒュンツと音を立ててそれらは消え、今度は強盗犯の背中とわき腹に突き刺さった。

「ぎゃああああああああああああ!!!!」

「お、まだ死なないか。……えっと、これでいいかな？」

今度は厨房にあった大ぶりのリンゴを手に取り、

「リンゴで死ぬ気分をご堪能ください」

それを頭の中にテレポートさせた。

強盗事件の発生から数十分後、アンチスキル警備員が突入した時には中には人間は一人もおらず。そこにあるのは人間だったものだけだった。

「……酷いじゃんよ。どうしてここまで残酷に殺すことができるじゃん」

警備員の一人、黄泉川愛穂は頭部を内側から破裂させられた死体を見ていた。

黄泉川は破裂した頭部と思われる（損傷があまりにも酷く原形をとどめていない）の中心に落ちている赤黒くなったりリンゴを見つけた。

「頭の中にリンゴをレポートさせたのか。やることが残酷すぎるじゃんよ」

「黄泉川さん、ジャッジメント風紀委員の方が」

部下に呼ばれ、店の外に出て行く。

学園都市に所属する教師で構成される警備員アンチスキルと違い、ジャッジメント風紀委員は学生による治安維持組織だ。

あれは子供には少々刺激が強すぎる。

「黄泉川愛穂じゃん。よろしく」

「風紀委員第177支部所属の白井黒子ですの。以後、お見知りおきを」

「それで、犯人に心当たりがあるじゃん？」

「ええ……、あの状況で、能力的に考えても一番可能性が高い人物を一人、知っておりますの」

黒子は少し間をおいて、ついさっき知りあった自分より上位の空間移動系能力者の名を告げた。

「学園都市に8人しかいないレベル5の第8位……オーバーポイント超越移動、狩初
京谷ですの」

強盗、蛋白爆破へプロテインボンバー（後書き）

現在の票は、

黒子 3 票

絹旗 2 票

初春 1 票

佐天 1 票

フレンダ 1 票

黒子一歩リードです。

まだまだ投票は受け付けておりますので、よろしく願いします。

（追加設定）

通常、空間移動系能力者が同じ空間移動系能力者を移動させようとすると、お互いの能力が干渉してしまい、移動させられない。

が、京谷はなぜかこの法則を無視し、白井黒子などの空間移動系能力者を移動させることができる。

始動、暗部組織へアイテム

学園都市のとある学区のとあるファミレス。
そこには4人の少女と1人の男がいた。

「あれ？今日のシャケ弁と昨日のシャケ弁はなんか違う気がするけど。あれー？」

真昼間のファミレスで堂々とコンビニのシャケ弁を食す女は麦野沈利。

明るい色の半袖コートを着込んでいる麦野は、ウエイトレスがびくびくしながら見ていることに気づかない。

「結局さ、サバの缶詰がキてる訳よ。カレーね、カレーが最高」

麦野の隣にいる金髪碧眼の女子高生はフレンド。

一見するとかかなりの美人だが、サバの缶詰を缶切りで開けられないのか、ビニールテープのようなものを缶の周りに張ると、電気信号を取り付け爆薬で焼き切った。

こんな光景を見せられたらナンパどころか近寄ることも恐ろしい。

「香港赤龍電影カンパニーが送るC級ウルトラ問題作……様々な意味で手に汗握りそうで、逆に超気になります。要チエック、と。滝壺さんはどう思いますか？」

フレンドの向かいに座る十二歳ぐらいの少女は絹旗最愛。麦野やフレンドの無茶苦茶な奇行を気にも留めず（良識があるとか心が広いとかではなく、彼女自身も麦野たちと同じ類の変人なのだ）となり座る脱力系の少女、滝壺理后に話題を振る。

「……なんか今、超腹立たしい地の文があつた気がします」
「大丈夫だよ、きぬはた。私はそんなきぬはたを応援してる」

女の感、という奴だろうか。

妙に鋭い感覚を見せた絹旗を、滝壺は応援しているようだ。

「それで、滝壺さんは超どう思いますか？この映画」

「……南南西から信号が来てる……」

「超答えになつてない答えありがとうございます」

彼女たちは『アイテム』。

学園都市の非公式組織。暗部に身を置く彼女たちの仕事は、学園都市のトップ『統括理事会』を含む『上層部』の暴走を止めること。そこには『アイテム』も含まれ、また彼女たち以外の『暗部小組織』も含まれる。

彼女たちと行動を共にしている男、浜面仕上は『アイテム』ではない。

厳密には、アイテムの『正規メンバー』ではない。
アイテムの下部組織に所属する、いわゆる下っ端という奴だ。

(……にしても、女だらけの中に男が一人つてのは居心地が悪いな。
あーあ、アイテムに男入らねえかな)

傍から見れば、浜面のハーレム。非常にうらやましく見えるのだが、彼女たちは学園都市の暗部に身を置くいわば『殺し屋』にも等しい存在。

並の女よりもはるかに高い戦闘能力を誇るし、性格的にも癖があり

すぎる連中だ。

ただの無能力者の浜面が行動を共にするには、ちょっと危険すぎる人たちである。

「それでさー、この前も言ったでしょ。第8位」

麦野がシャケ弁をもぐもぐ食べながら第8位のレベル5の話題を持ち出す。

アイテムの話題は、ここ最近第8位で持ちきりだった。

「オーバーポイント超越移動、狩初京谷。一昨日、喫茶店の押し入った強盗を超殺したって噂ですけど、本当ですかね」

「大丈夫、私はそんなかりそめを応援してる」

「結局、滝壺って最近それしか言っていない気がするわけよ」

「お前ら話題がそれまくってるぞ」

話題が京谷から滝壺の台詞に移ったところで浜面が元の話題に戻す。そんなアイテムの面々を見て麦野はため息をつきながら続ける。

「滝壺の口調なんてどうでもいいから。さっき絹旗が言ったけど、もし強盗を殺したってのが本当ならこれはチャンスね」

「チャンスだと？」

「そう。調べただけけど、第8位の奴、幼い頃に『スクール』に両親を殺されてんの。よく分かんないけど、学園都市に來た理由も多分復讐ね」

周りに大勢の人間がいる中で、ペラペラと第8位の過去をしゃべってしまふ麦野に浜面は若干の嫌悪感を覚えた。

両親を殺された、なんて他人に知られて気持ちのいいことではないはずだ。それを簡単に突き止めてしまふアイテムの情報収集力にも、

それを調べてしまふ麦野にも。

「つまり、どの道暗部に接触してくるだろうから早いうちにアイテムに超引き入れようって魂胆ですか」

「そうゆうこと。じゃあ浜面。とりあえず、アシ確保」

「へいへい」

浜面は麦野に言われるままにファミレスを出ていく。
こついつた雑用は彼の仕事なのだ。

「麦野」

「何よフレンド」

「もし断られたら、麦野はどうするつもりなわけよ？」

「そんなの超決まってるますね。麦野のことだから、他の暗部組織に取り込まれる前に引き入れられなかったら殺すでしょうね。超間違いないく」

「絹旗、アンター一回死んどく？」

「超お断りです。それにこんなところでメンバーを減らすわけにも行かないでしょう？」

「ま、そうね」

「結局、麦野ってときどき冗談に聞こえない冗談言うから怖いわけよ」

「私今まで冗談言ったことないけど」

「え……？じゃあ昨日『次仕事ミスったら殺す』っていうのは……？」

「勿論、本気」

「……………」
「大丈夫だよ、フレンド。私はそんなフレンドを応援してる」

アイテムの雑談はかなり物騒だった。

「じつじつ連中と一緒にいる浜面仕上は、本当に不憫な男である。」

始動、暗部組織へアイテム〈後書き〉

アンケートのご協力をしてくださった皆様、ありがとうございます！
現在の票は、

絹旗 4票

黒子 3票

初春 1票

佐天 1票

フレンダ 1票

です。絹旗トップ！

アンケートですが、21日の0時を締め切りとさせていただきます。

では次回もよろしくお願ひします！

以下戯言

書くなら絹旗フラグが一番楽でいいなあ
……

来訪、絹旗最愛へオフェンスアーマー〈前書き〉

フラグ相手の投票をしてくださった皆様、ご協力ありがとうございました！

結果は

絹旗 7票

黒子 3票

初春 1票

佐天 1票

フレンド 1票

最後の最後で絹旗ぶっちぎり。

というわけでオリキャラのCPは絹旗最愛に正式決定しました。
アンケートのご協力ありがとうございました！

来訪、絹旗最愛へ「オフエンスアーマー」

とある喫茶店の強盗が殺された事件から土日を含んで月曜。狩初京谷は自宅にいた。

学園都市の学生にしては珍しく、学校の寮に入らず手頃なマンションに住んでいた。

超能力者認定を受けてからは、奨学金もたっぷり溜まり、生活費には困っていない。ちなみに時計は午後の3時を指す。つまり彼は学校をさぼっているわけだ。

理由は簡単。クラスメートの初春に例の事件のことを聞かれたくないからである。

京谷は最初、レベル5なら学園都市のトップが権力を行使して捕まえるのを防ぐかと思っていたが、どうやらそういうわけではないらしい。

昨日も買い物帰りに警備員アンチスキルに捕まりそうになった。

どうやら自分が犯人であることはすでにバレバらしい。

「……めんどくせえな」

京谷自身、目的があつて学園都市に来たのである。その目的とは、警備員に捕まることではない。

学園都市の暗部の、できれば『スクール』といち早く接触したいのだ。

「……待ってるよ、翼の男。必ず俺がぶち殺す」

超能力の類なのだろう。その男は背中から6枚の白い翼を生やし、

一瞬で京谷の両親を殺した。
京谷が小学校に上がって間もない頃の話である。

分かっていることと言えば、その能力者が学園都市の暗部組織『スクール』のメンバーであるということだけ。
それ以上は何も知らなかった。

「……さて、これからどうするか。気長に待つしかねえかな……」

（簡単に人を殺すレベル5が居るんだぞ。さつさと接触してこいよ
『スクール』）

スクールに限らず、暗部の人間が接触してくるのを、京谷は窓の外を眺めながら待っていた。

初春飾利は午後の授業を受けながら、自分の右斜め前の空いた席を見ていた。
先週末にはいた人間が、今はいない。

（白井さんも御坂さんも、佐天さんも狩初君を犯人のように……）

狩初君はそんなことしないのに……)

初春の言い分は論理的じゃない。

出会って数日の人間を、どこまで理解しているかもわからないのに、人を殺すか殺さないかなどという物が分かるわけがない。

(狩初君……明日は来るかな……)

明日あったら話を聞こう、と初春はとりあえず授業に意識を集中させた。

「どうして私なのか、いまだに超納得ができません」

絹旗最愛は愚痴をこぼした。

第8位のレベル5、狩初京谷を『アイテム』に引き入れるために彼女は京谷が住むマンションへと足を運んだ。

「だいじょうぶだよ、きぬはた。私はそんなきぬはたを応援してる」

共に行動しているのは滝壺理后。

絹旗と同じく『アイテム』のメンバーだ。どうやら

「滝壺さんもそう思いませんか？この人選じゃ、最悪二人とも超殺されて終わりそうですけど」

『アイテム』のリーダー、麦野沈利曰く、『年の近い絹旗と人畜無害そうな滝壺なら相手も油断する』とのこと。

んなわけねえだろバカなどと言ってしまえばその瞬間人生が終わるので黙っておいた。

「だいじょうぶ。そういうときはきぬはたの出番だから」

「私と空間移動系能力者として超絶絶望的に相性が悪いですから」

「だいじょうぶ。わたしはそんなきぬはたを応援してる」

と、漫才をしながら気がつけば超越移動オーバーポイントの部屋の前まで来ていた。

「まあどっかで麦野とフレンドが見てるでしょうし、いざとなったら麦野に任せますから」

レベル5の処理はレベル5に任せることにして、絹旗はインターホンを押した。

「どうやら中にいるようで、中から『今出ます』と声が聞こえてきた。」

（不用心ですね。こんなのが暗部で通用するとは超思えません）

「きぬはた」

「超分かってます」

絹旗をドアが開かれるよりも早くドアに手を当て、鉄製の重いドアを吹き飛ばした。

彼女の能力、オフエンスターマー窒素装甲による現象だ。

窒素を操る能力者である絹旗は、能力を行使することによって、自動車を簡単に持ち上げることすらもできる。操れる窒素の範囲は手のひらから数センチ程度なのだが、ただドアを吹き飛ばすだけならそれで十分だった。

「よう。面白えことしてんじゃないか」

後方から声が聞こえてくる。

と同時にコンクリートの塊が絹旗の頭上にテレポートし、絹旗はそれを窒素装甲で防御する。

「……………ういてる」

「……………超浮いてますね」

第8位、オーバーポイント超越移動、狩初京谷は宙に浮いていた。

「いや、浮いてるわけじゃないんだけど」

京谷の言うとおり、マンションの壁に部屋の床を喰いこませてあるだけなのだ。

そのおかげで足場ができ、絹旗や滝壺からの視点だと浮いているように見えるだけである。

「アンタ達何者？いきなり人の家のドアぶっ壊すとか、まともな人

「間じゃないよな？」

「私が超説明します。狩初京谷、『アイテム』に入りなさい」

襲来、垣根帝督へ「ダークマター」

「私が超説明します。狩初京谷、『アイテム』に入りなさい」

学園都市の暗部組織の一つ、『アイテム』の構成員、絹旗最愛はそう告げた。

それに対し、京谷はなにも返事をしない。

「……超説明を省きすぎました。『アイテム』というのは、この学園都市の暗部組織の一つです」

『暗部』という単語に京谷がわずかに反応する。

「……面白い勧誘だな。宗教なら間に合ってる」

「超話を聞いてなかったようなのでもう一度説明します。『アイテム』というのは……」

「わあーったわあーった。もう十分分かりましたよ」

「……超バカにされてる気がします」

「大丈夫だよ、きぬはた。私はそんなきぬはたを応援してる」

絹旗は京谷の態度に青筋を立てるが京谷は気にも留めない。
というか、絹旗と滝壺を見ていない

（『アイテム』か……。『スクール』と同じようなモンなんだろうな、きつと。できればスクールの方がありがたかったが、まあどっ

ちにしろ同じか。暗部に入れれば、一応目的達成には近づけるしな）理想形は『スクール』だったが、『アイテム』だろうと暗部組織の一つであることには変わらない。暗部に所属していれば、いつか同じ暗部組織の『スクール』と衝突する可能性はあるし、『スクール』のメンバーを殺すという大義名分もできる。代わりに相手を殺すチャンスをつかがうことができなくなるというデメリット付きだが。

「まあ、多分選択肢はないんだろ？」

「超よく分かっているじゃないですか。これは命令です。狩初京谷、『アイテム』に入りなさい」

自分たちが暗部の人間であると明かした以上、京谷が断ればこの二人は即座に京谷を殺しにかかってくるだろう。

片方はドアを吹き飛ばしたりしていたから、風力使用エアロハンドか、または念動力キネシスの系統の能力者だろう。

片方の能力が分かっているということは、逆にいえばもう片方は分からないということでもある。

というかこの二人のどちらかが『アイテム』に所属する超能力者レベル5とも限らない。

片方はドアを吹き飛ばしたが、別にそれが能力の限界だとは誰も言っていないからだ。

「んー、分かった。それじゃあ……」

よろしく、と言おうとしたところで、京谷は瞬時にレポートし、絹旗は滝壺を抱えてその場を離れた。

何か光線のようなものが、3人を同時に攻撃してきたからである。

京谷がテレポートした先は、同じマンションの屋上。

「よう。お前が新入りのレベル5でいいんだな？」

「やっと見つけたぞ……！」

京谷とアイテムからの使者を襲撃した男は、背中に6枚の純白の翼を生やしていた。

『ダークマター未元物質』 垣根帝督。

学園都市の第2位と第8位の、復習する側とされる側の、あまりにも早い衝突。

襲来、垣根帝督へダークマター〈後書き〉

次回、京谷vs垣根……になるといいなあ。

妥協、超越移動へカリソメキョウヤ

「お前が新入りの超能力者シキルで良いんだな？」

「翼野郎……！何の用だよ……！」

京谷は威嚇しながら垣根と距離をとる。

垣根のような能力自体に攻撃力があるのとは違い、京谷の超越移動オーバーポイントそのものには物理的な攻撃力はないからだ。

何かしらのテレポートさせる物体がなければ、京谷の戦闘能力はさして高いものではなくなくなってしまふ。

「ああ、お前が強盗殺しって聞いてな、ちようどいいから『スクール』に勧誘しようと思ってたが、『アイテム』に先を越されたからな」

「それが俺を殺そうとするのとどういふ関係があんだよ」

「どうやらそつちの交渉は終わつちまった見てえだったからな。『スクール』に引き込むのも面倒だし、ここで殺すぞ」

思えば『アイテム』にも似たようなことを言われた気がする。

どうやら暗部の連中は、京谷にある程度の情報を与え、それで引き込むことができなければその場で始末するという方針らしい。

だが京谷は、

「そうかよ。出来るもんならやってみな」

垣根を挑発した。

京谷は垣根帝督という人間が、学園都市第2位のレベル5だということを知らない。

それでも、垣根の立ち振る舞いから（おそらくだが）自分と同じレベル5の能力者であることは理解できていた。

もしレベル5なら、間違いなく自分より格上。まともにぶつかって勝てる相手とは思えない。

それが、かりそめきょうや超越移動がかきねていく未元物質と対峙して感じた現実。

突如、垣根帝督をエアコンの室外機が襲った。

厳密には、室外機を投げつけた絹旗最愛だ。

「……痛えな。そしてムカついた。まず第8位を殺すつもりだったが、まずはテメエから殺す。『アイテム』なら手加減してやる必要もないしな」

「出来るものなら超やってみてくださいよ。狩初京谷は私たち『アイテム』のメンバーです。彼の教育も、超私の仕事なんですよ」

「いや、勝手に決めるな」

最初から入るつもりだったが。

「テメエは確か、絹旗だったか？レベル4大能力者如きがレベル5超能力者に勝てると思ってるのか？」

「間違いなく超勝てないでしょうね。だから私は超死んでも狩初京谷が逃げ切る時間を稼ぐ必要があるんです」

「いや、俺テレポーター空間移動系能力者なんですけど」

なんか会話に乗り切れてない気がする京谷。
絹旗がここまで言っているのだから、一緒にいたピンクジャージの少女はとっくに逃がしたのだろうか。
確かにあれは戦闘には向いてなさそうだったが。

「まあいいぜ。殺してやるからとつとと死ねよ」

「ただでやられてやるつもりは超ありません。せめて右腕くらいは貰いますから」

さつき京谷が言った通り、京谷は空間移動テレポートで逃げればいいだけの話なのだ。京谷の超越移動オーバーポイントの射程範囲はおよそ5 km。いくら垣根でも追い切れる距離ではない。
それができない、と絹旗最愛は目で言っていた。

「いつとくがな、空間移動テレポートして逃げようなんて思わない方がいいぜ」

「何だと？」

「お前は知らないだろうがな、俺の能力は『未元物質ダイクマター』。この世に存在しない素粒子を生み出す能力だ」

『未元物質』。垣根帝督が所有する学園都市第2位の能力。

「理論上は存在するはず」とか「存在するかもしれない」のような陳腐なものではなく、本当に存在しない素粒子を生み出す能力。

それは、この世に存在しないがゆえにこの世の物理法則には従わず、独自の法則を持って存在する。

「それが俺の『未元物質』だ」

「……それで俺は空間移動テレポートできないとでも？」

「ああ。この世界はたった一つの異物でがらりと変わっちまう。これが『未元物質』。ここはテムエの知る世界じゃねえんだよ」

垣根は少しずつ、京谷と絹旗との間合いを詰めていく。

『未元物質』が混じった世界では、京谷の能力は今までどおりには働かない。

それが垣根帝督が狩初京谷を逃がさない自信だった。

「……上等だ」

「あ？」

「こい。えっと……超超うるさいの」

「超超うるさいのって……」

京谷はがしっ、と最愛の腕をつかむと、垣根を見て

「……次、会うときは殺すからな」

そう言い残し、『未元物質』による危険も顧みずテレポートした。

「あ……、ハッターってばれたか？」

その場にポツリと残された垣根は、京谷の鋭さに頭をポリポリと書くのだった。

合流、麦野沈利へメルトダウン！〈前書き〉

間があきました…。

理由については活動報告の方で言いますので…

合流、麦野沈利へメルトダウン！

垣根帝督の襲撃から超越移動オーバーポイントの能力で逃げてきた狩初京谷はため息をついた。

「……………超能力者レベル5って変なのばっか……………」

「殺すわよ」

京谷の前に立つ女……学園都市の暗部組織『アイテム』のリーダー、麦野沈利は凄んだ。

「まあまあ麦野、相手は小学生ですから大人な麦野は超我慢するべきですよ」

「殺すぞゴラ」

今度は『小学生』という単語に反応した京谷が絹旗に対して凄んだ。こうなると京谷の言った『レベル5は変人ばかり』は案外的を射ているかもしれない。

ともかく、とあるファミレスに『アイテム』の正規構成員4人、下部組織1人、そして新入り1人が集まっていた。

「……………訂正するわ。『アイテム』ってのはよほど変人の集まりらしいな」

「ホントに殺すぞ」

「超殺します」

「爆殺と毒殺どっちがいいわけよ？」

「……ころしたい」

「いくらガキでも容赦しねえぞ？」

京谷の一言に『アイテム』全員がいきり立った。

「いや文句言えないだろ……。ファミレスでシャケ弁食ってる奴とかサバの缶詰爆弾で開ける奴とか」

「それでどうして俺や絹旗や滝壺まで変人扱いされなきゃならねえんだ!？」

「浜面と同意見というのは超ムカつきますが超その通りですね」

「絹旗さん!？」

「いや、突っ込まない時点でアンタらも同罪だから……」

この時滝壺理後は舞台の上で漫才をする京谷、絹旗、浜面を脳内で描いていた。

「アンタ達じゃ話が進みそうもないわね……。まあ後でシバいとくとして、とりあえず歓迎するわよ。第8位」

「とりあえずツすか……」

とりあえずなんかいい!? いやお互いにもつと親交を深めようよ仲間なんだし! とか突っ込もうかとおもった京谷だったが、なんか突っ込んだら殺されそうな気がしてスルーした。

「自己紹介とかしといた方がいいわね。麦野沈利。一応この私以外
役立たずのアイテムのリーダーよ」

「……どういう意味だ（ですか）（なわけよ）！」「」「」

「……こりゃあいろいろ間違えたかもなあ」

あながち外れていないことを一人静かにつぶやく京谷だった。

暗躍、暗殺部隊へスピード〈前書き〉

今回はアイテム勢は出番なしです。

暗躍、暗殺部隊へスピード

学園都市の第一九学区は、特に何の用途もないさびれた学区である。

そのため、時たまに不良の溜まり場として使用されることもある学区の一つでもある。

この第一九学区に来るものは大きく3種類に分けられる。

一つは不良。スキルアウト

一つは不良を取り締まるためにやってくる風紀委員。ジャッジメント

そして最後の一つは

暗部組織の人間である。

12人いる統括理事会のメンバーの一人、手駒窮破。てしまきゆうは
統括理事会の中で、長点上機学園や霧ヶ丘女学院といった能力開発に長けた学園と最もつながりの強い人間である。

彼は今、4人の若い男女に拉致され第一九学区の廃工場にいた。

「はあ……長点上機から護衛になる能力者を輸入してるっつーから
どんなものかと楽しみにいていたんだが……とんだ期待外れだな」

声は17、8くらいの男のもの、立ち振る舞いからリーダー格だと
うかがえる。

「統括理事会のメンバーにしちゃあ、警備が甘かったわよね」

今度は少女の声、14歳前後の、高い声だった。その少女はべつた
りともう一人の男にくっついてる。

「……君たちは、何者なんだ……!？」

「ん？俺たちが何者か知りたいのか？そーかそーか、じゃあ教えて
やるっ」

相手を小馬鹿にしたような言い方で男は手駒に近寄る。

「俺たちは暗殺部隊^{スベード}。アンタ達みたいな敵がいる奴を消すのが仕事
さ」

「そういうわけよ。アンタを消して欲しいって人がいるの。だから
消えてくれると嬉しいな」

話の内容は極めて物騒である。手駒にとってはそれ以上に恐ろしい
話だった。

手駒は自身の武装を殆どしない。代わりに長点上機学園や霧ヶ丘女
学院といった、能力開発にと出している学園の卒業生を、高い賃金
で護衛として雇っているのだ。

メジャーな能力者からトリツキーな能力者まで、様々な能力者を雇っていたが、その全員が大能力者^{レベル4}だったことも、手駒が自信を武装しない理由の一つである。

この二人はレベル4の能力者を100人近く蹴散らして自分を拉致した。

その現実が、手駒を恐怖のどん底へ陥れた。

「つか、源次と美華のヤローはなにやってんだ。遅いだろ、いつものことだが」

「また美華のいつもの癖でしょ。獲物をいたぶって殺す癖」

「んでもって止めようとした源次が半殺し、と」

手駒を拉致してきた4人のうち、ここにいない二人は現在別行動中のようなのだ。

この場所で、落ち合うことにしているらしい。

「めんどくさいな。もう消しちまってもいいよな？」

「さあ？まあ既に集合時間は4分過ぎてるから、あいつらの責任だけだ」

「……これ以上遅れるのはまずい。もう消すぞ」

男は手駒に近寄り、そっと手駒の肩に手を置いた。

「安心しろよ、痛くない。ただ、今まで生きてきた時を遡るだけだ」

「……！？それは、どういう……ッ」

手駒は突如に自分の身体の異変を感じ取った。
身体がみるみるうちに縮んでいくのだ。

だんだんと視界が狭くなっていき、もう物事を考えることもできず、
手駒の体は消滅した。

「相変わらず暗殺にもってこいの能力よね、タイムデューター時間逆行。血は出ない、
死体も残らない、衣服の処分だけで完全に消滅」

「レベル4だと『逆行』の一方通行だけどな。これがレベル5にな
ると時間の先取りもできるようになるらしい」

静かに立ち上がると、かつて存在していた手駒という男が身に着け
ていたものをつかむ。

「……なかなかいい趣味をしているな」

「どーでもいいわよ。終わったならそれさっさと源次と美華に渡し
て帰ろう？たまにはデートに連れてってくれてもいいじゃない」

「ああ、そういう約束だったな」

男はビニール袋を取り出し、手駒の装備品を詰めるとその場に放置
する。

「でも面倒よね。一日一回しか使えないなんて」

「まあな。だが問題はないだろう。使い勝手は優衣の方が断然いい

だろうが」

「まあねー あ、今日は第四学区でパーっといかない!?! あたしピザ食べたいな!」

「誰の奨学金だと思ってやがる……」

「なーなー、城葉あ、城葉あ」

「分かったから……まあいい。そのあとはお前を美味しく頂いてやる」

「ええ!?!と驚いてみたり? やれるものならやってみなー 四秒で殺しちゃうぞ?」

二人は腕を組みながら第一九学区を後にする。

しばらくしてから警備員アンチスキルが第一九学区を搜索したが、何も見つかることはなかった。

暗躍、暗殺部隊へスピード（後書き）

オリキャラのオンパレード！

登場した人の名前をまとめると、

タイムテリート
時間逆行 城葉 しろは

城葉と一緒にいた少女 優衣

別行動中 源次と美華

ご愁傷さまな人 手駒窮破

ですね。

うん、よく分かん。

スピードの人たちはしばらく出番多しかも。

家無、一超越移動へオーバーポイント

「どづいうこつたあ……」

とあるファミレスでの自己紹介も無事に終え、とりあえず自宅（つか某所マンション）に戻ってきた第8位のレベル5、オーバーポイント超越移動と狩初京谷。

第一声は呆然とした声だった。

形態をさつと取り出しついさつき交換した番号へ電話をかける。

画面には『絹旗最愛』の文字。

『もしもし』

「……おい、家が大破してるんだが」

一言で言うなら、禁書目録？期19話の一方さんち的なことになっていた。

『ああ、私が第2位の攻撃を防いだ時に偶然超壊しちゃった奴ですね』

「しらつとぬかすなゴラ。俺は一体どこで寝泊まりすりゃあいいんだよ……」

いくら超能力者といえど、借りて一週間もたたずに部屋を大破させればただでは済まない（金銭的な意味で）。
通帳のケタが一つ減るような気がした。

「…とりあえず私たちはまださっきのファミレスに超いるので戻ってきてください」

「テメエあとで感謝料請求すつからな……！」

苦し紛れの台詞を残し、携帯を切る。

ミシミシと音を立てていたのは気のせいではない。

「っーか、何をどうしたらこんなに……！」

まあ色々つぶつ壊れてはいるものの、とりあえずまだ使えそうなものを探すことにする。

……ねえじゃねえか。

炊飯器から洗濯機まで、粉々から塊まで様々なレパートリー。

風呂場に至っては空間ごとえぐられていた。

「絹旗あ……あのアマどうしてくれんだよこれえ……！」

手にしていた携帯がバキィッ！と悲鳴を上げて握りつぶされた。

「絹旗クロス」

「やれるものなら超やってみてほしいものですね」

「落ち着けお前ら」

再び某ファミレス。京谷と絹旗がお互いを睨みあっていた。

「いや、どう考えても絹旗が悪いでしょ」

「結局、どうかんがえてもそうという結論に辿り着くわけよ」

「大丈夫だよ、きぬはた。私はそんなきぬはたを応援してる」

「超四面楚歌ですか!?!」

「当たり前だろ!」

傍から聞いてればどう考えても暗部組織とは思えない会話。
しかも一人はリアルホームレス中学生である。

京谷としては絹旗への復讐をぜひとも遂行したいわけだが、それよりも先に寢床を確保しなきゃならないわけだ。

ここに来る前にマンションの管理会社に連絡して、別の部屋を借りられないかどうか確認したのだが、『また壊されてはたまらない』
ということ却下。

学生寮を借りてもいいのだが、学生寮には初春飾利という顔見知り
がいる上に、その初春の友達であるレベル5の第3位、超電磁砲レベルガンこ

と御坂美琴や風紀委員の白井黒子もたまに訪れるため、ちょっと都合が悪い。ジャッジメント

学園都市は人口の8割が学生なため、『アイテム』の溜まり場であるこのファミレスに近いマンションは京谷が住んでいた場所以外にはないという、まさに八方塞がりな状況である。

「いや、マジに俺ホームレス中学生……?」

ボソツとつぶやいた京谷の言葉に麦野、フレンダ、絹旗の3人が吹き出す。

「いや皆さん笑わないでくださいよ!?!?つか絹旗テメエが一番笑ってんじゃねえ!?!お前のせいでこうなってんだよ!?!」

「私が超悪いって言うんですか!?!?ていうかどうして私だけ超敬語じゃないんですか!?!?」

「テメエはどう見たって俺と同じ年とかだろ!」

「誰が小学生と超同い年ですか!?!今ここで超殺す!」

「やれるもんならやってみやがれゴラァ!レベル4如きでレベル5に勝てると思うなよ!?!?」

「やめろ!」

低レベルな話で言い争う絹旗と京谷の目の前を、一筋の細い光線が飛ぶ。

麦野沈利の能力、『メルトダウナー原子崩し』によるものだ。

「次当てる」

「ゴメンナサイ……」

この場は麦野が恐怖で沈めた。

居候、超越移動へオーバーポイント

狩初京谷はふいに目覚めた。

「……………朝か」

思い返してみれば、昨日は散々な一日だった。

待ち望んだ暗部からの接触は『スクール』ではなく『アイテム』。
その直後にレベル5の第2位、『ダークマター未元物質』垣根帝督に襲撃され、
アイテムに入ったものの、同じアイテムの構成員の絹旗最愛に家を
破壊され、

そして朝、

「……………今日、初仕事だっけ」

京谷は絹旗宅にいる。

「起きつかあ……………」

のそ……………とだるい音を立てながらドアに手をかけ開ける。

ガチャ

「……………え？」

「……………あ」

ドゴン！

「ぶべらっ！？」

吹っ飛んだ。

「な、何してるんですか！？超変態ですか！？」

「ご、誤解だろ！っーかそんな格好でそこにいる方が悪いだろ！」

京谷がドアを開けると、そこに立っていたのは家主絹旗最愛。
ただし格好に問題あり。
絹旗最愛は下着姿だった。

「問答無用！超ここで殺す！」

「殺されてたまるか！っーかなんか着ろ！」

「ふぁ！？／／／」

絹旗家の朝は騒がしい。

「……………」

「……………」

(超雰囲気悪っ！)

京谷心のシャウト。

あの後京谷は朝シャワーで夜のうちにかいた汗を流し、絹旗はパーカーとショーツパンツを着用。
二人で朝食に勤しんでいる。

「……………」の後

「ん？」

「この後、麦野たちと合流して目的地に超移動します。今回の仕事は簡単です。暗部組織『暗殺部隊^{スぺード}』の処分」

「暗殺部隊^{スぺード}？」

「私たちと同じ、主に学園都市の不穏分子の処理が仕事の組織です。ただ、最近メンバーの暴走が超目立っているので私たちのところに任せちゃおうって魂胆でしょう」

「へー、学園都市のお偉いさんってのも大変だな」

スーブを手に取り口に運ぶ。

「そういえば、この前死んだ手駒とかいう統括理事会メンバーも超スピードの仕業でしたね」

「ブツ！……ゲホゲホ」

そしてむせた。

「ちょ……統括理事会って、そいつら大物すぎるだろ……」

「といっても、手駒は^{レベル4}大能力者の能力者を大量に雇って自身は超全く武装していなかったようですけど」

京谷は想像する。

100人単位の^{レベル4}を。

「……そいつら、強すぎだろ」

「そいつらの処分が今回の私たちの仕事です」

「はあ……不幸だ」

とある^{レベル5}超能力者が、とある^{レベル0}無能力者の口癖を呟いた。

任務、暗部組織へアイテム

「全員集まったわね」

アイテムのリーダー、麦野が見回す。

こういう言い方をするとどっかのアジトかと思うがいつものファミレスである。

「スピードがいつも根城にしてるのは第19学区の廃工場。つっても複数あるけどね。そこに標的ターゲットを連れ込んで殺してる」

「やり方えげつねえな」

「ビビったんですか超変態」

「テメエ朝のは不可効力だろうが」

割とシリアスなシーンなのに全てをぶち壊す二人。

「何だよお前ら、なんかあったのか」

「超聞いてくださいよ浜面。この変態超能力者が」

「はいはい。私が悪うござんした。麦野さんとうとと進めちゃって
いっすよー」

「……………」

「テメエらそのペースで仕事ミスったら殺すわよ」

第4位は割と本気であった。

「既に目星が付けてある建物をしらみつぶしに漁っていく。普段なら浜面に足を用意してもらっただけ……今回は空間移動テレポートを利用する」

「俺の出番ってわけッすか」

京谷の能力は触れてさえいれば何でも飛ばせる優れ物である。限界質量も5000kgオーバーなので問題はない。

「いや、狩初、滝壺、絹旗は空間移動テレポート、あたしとフレндаと浜面は普通に車ね」

「また俺に雑用やらせる気が!？」

「浜面さんって下部組織なんだからそれが仕事なんじゃ……」

「狩初え……俺のことさん付けで呼んでくれんのお前だけだよ……」

浜面は初めてアイテムのメンバーに目上の人間扱いされて喜ぶが、

「浜面キモイ泣くな」

「結局、浜面にさん付けの価値なんてないわけよ」

「所詮浜面は超浜面なんですから黙ってアシ確保してください」

「……………はまづら、ファイト」

「畜生！やってやるよ！やればいいんだろ！」

浜面は泣きながらアシ確保に出て行った。

ちなみに滝壺が応援の仕方を変えたことには誰も突っ込まない。

「バカかアイツは……」

「さすがにそれはひどくないっすか……？」

「バカにはあれくらいが調度いいの。行くわよフレンド」

「おっけー、それじゃ狩初、死なないようにね」

「ははは……不吉な言葉残してかないでください……」

浜面を追って麦野とフレンドも出ていく。

「……………行きます？」

「うん、はやくいった方がいいとおもっ」

「じゃあ行きましようか」

「なんで私には超聞かないんですか？」

「え？聞く必要あつた？」

「超殺す！」

スマートフォンで読む。

戦闘、浜面仕上へレベル0 (前書き)

PV50、000達成です！ありがとうございます！ございました！そしてこれからよろしくお願ひします！

戦闘、浜面仕上へレベル0

浜面仕上は苦戦していた。

何にと言え、『何にでもない』である。

いつも通りにアシ（バリバリ盗難車）を確保し、巨乳警備員よみかわあいほに見つかりそうになるところをギリギリで切り抜け、麦野、フレンダと合流して第19学区まで車を走らせた。

スピードが利用することがある廃工場の一つに足を踏み入れた途端に何者かの襲撃を受け、現在に至る。

（畜生！ただの無能力者レベル0の俺に、どう戦えっというんだよっ！）

敵は見えなかった。

おそらく能力で視覚に働きかけるとかその手の能力者であることは間違いない。

問題は、『浜面仕上がどうしようもない無能力者レベル0である』ということだ。

麦野とフレンダとは天井から落ちてきた鉄骨やらなんやらで分断されてしまった。

麦野の罵声や叫び声が飛んできたところをみると、向こうにも敵がいるらしい。

（くっそ！みえねえ敵とどう戦えっつうんだよ！？）

麦野か京谷なら、あるいは絹旗やフレンダなら、手当たり次第に攻

撃するという方法もとれたかもしれない。

しかし浜面は違う。高位能力者でもなければ、爆薬の取り扱いに長けているわけでもない。

完全にただの凡人である。しかしそれゆえに、

「チツクシヨオオオオオオオオ!!!」

生に対する執着も大きかった。

『アイテム』に限らず、暗部組織の人間はいつ死ぬか分からない。

それだけの覚悟を背負って暗部に所属している。

しかし浜面は違う。浜面はついこの間まで、仲間とともにやんちゃをしていたただの不良少年である。

気がつけばアイテムの下部組織に入れられ、正規メンバーとともに行動してはいるものの、何の覚悟もないただの少年である。それゆえに、生きることに対する執着もアイテムのメンバーより大きかった。

(こうなることは分かってたんだ！アイツらという以上、こうやって危ない目に会うことくらい分かってたんだ！だったらここでハラあ括ってやる！)

浜面は隠し持っていた一丁の拳銃を、適当に撃ちまくる。

だが、それだけで倒されてくれるほど、相手は甘くはなかった。

自分の姿を隠す能力を使ってくる以上、闇雲に攻撃されることは想定済み。何の効果もない。浜面の背後から、大きな衝撃が襲ってきた。

「ぐおっ!?!」

背後からの不意打ちに耐え切れず、吹っ飛んでしまう。

「あーあー、そういうヤケになった攻撃してるようじゃまだまだだよ、おにーさん」

「……………!?!」

「何その意外そうな顔。あ、もしかして、あたしがこんなだから驚いてる?」

虚空から現れたのは少女。黒髪ツインテールの、14歳前後の少女だ。

ミニスカートにパーカーと言う、なんともラフな格好をしている少女。

「テメエ、精神感応系能力者か……………!?!」

「え?ああ、まあ近いものはあるのかな?」

手を大きく振りながら否定のポーズをとる。

「あたしの能力は『盲点検査』^{インブライント}。単純に言つと、相手の盲点に入る能力だよ」

盲点。光が届かず、物体を見ることのできない部分である。

この少女、優衣の能力は、相手の盲点を探り当ててそこに無理やり押し入るといふ能力らしい。

「そのためには光量とか光の向きとかいろいろ変化させないといけ

ないわけで……こんな感じに！」

言い終わると同時に強い光が優衣の後ろから発せられる。

これと言った光源もないはずなのに、唐突に強い光が浜面の両目を襲う。

「ぐ……！？（見えねえ……！？）」

急に視界を奪われた浜面はすぐに目を空けることができず、再び優衣の打撃をもろに食らってしまう。

「ぐううつつ……！」

アバラ骨が嫌な音を立てて折れる。

それでも再び拳銃を取り出し、闇雲に撃つが当たるわけもなく、

「それじゃ、バイバイ。雑魚なおにーさん」

浜面が視力を失っているうちに再び浜面の盲点に入った優衣が、背後から襲いかかる。

戦闘、未元物質？〈ダークマター？〉

浜面たちとは別の場所、京谷の超越移動オーバーポイントで別のスピードが潜伏している可能性がある場所にやってきた京谷、絹旗、滝壺。

「……………いるな、誰か」

「超分かりますか。変態でもそれくらいは超できるみたいですね」

「それまだ引つ張るか……………」

口ではコントを繰り広げながらも、警戒は解かない京谷と絹旗。陣形としては、滝壺を挟むような形である。

理由は滝壺理后というこの少女の能力に由来する。

『能力追跡（AIMストーカー）』

相手のAIM拡散力場を記憶し、太陽系まで逃げても場所を特定できる能力。

直接戦闘には圧倒的に不向きな能力なうえに、戦闘能力もない滝壺を守るような陣形。

アイテムは滝壺の存在で成り立っているといっても過言ではないからだ。

「……………ほう、つまりはそのジャージの子が弱点と言うわけかい」

突如、上空から声がした。

三人が一斉に上を向くと、若くても高校生、大学生に見えなくもな

いくらいの男がいた。
高さは数メートルはあった。京谷達が上を向くと同時に、そこから飛び降りる。

全員が目を見つめた。

その男が、学園都市第2位の超能力者、垣根帝督と同じ翼を生やしたからだ。

「……………！！ テメエ、その翼は……………ッ!？」

「ああ、これかい、俺の能力だが？」

「ダークマター未元物質!？超あり得る筈がありません!コイツはどう見ても超垣根帝督には見えません!」

「……………違う。ダークマター未元物質じゃない」

「ほう、よく分かったな。能力追跡(AIMストーカー)の少女よ。俺は学園都市に7人いるレベル5の第6位、『ダークネスマター無限物質だ」

この男はダークネスマター無限物質と言った。

この瞬間、京谷の中でちょっとした疑問が浮かんだ。

暗部組織の情報と言うのは学園都市でもトップシークレット。しかもレベル5となればなおさらだ。
それがどうして学園都市の外にいた自分に入手できた?しかも簡単に。

この男が何かしたから?あり得る。同じ白い翼をもつ者だったら、

もう一人の罪を着せようとするのではないか？
そもそもあの『スクールにいる』という情報そのものが本当のもの
だったのか？

様々な可能性が京谷の頭を駆け巡る。

「して、オーバーポイント超越移動よ。お前は俺のことを覚えているか？」

この人のことが、全てを解いた。

「お前の両親は優秀な研究者だったな。子供の為に『原石』の資料
を盗んだおるか者でもあったが、なかなか面白い連中だったよ」

「……お前か」

「か、狩初？」

「ああ、俺だよ。第2位の野郎に罪を着せておいたが、お前、勘づ
いてるだろう？俺からバラしてやるよ」

「ぶち殺す!!」

懐に手を入れ仕込んであったナイフやフォークを無限物質に向けて
テレポートさせる。

が、

「効かないね」

テレポートしなかった。

「な………!?!」

「第2位の野郎が『存在しない物質を生み出す能力』なら、俺は『存在する物質を生み出す能力』だ。お前は触れてないと移動させられないんだろ? お前が使おうとしたものに薄い膜を張ってやればそれで終いだ」

「この野郎……ッ!」

京谷が自信をテレポートさせようとしたとき、

ガゴン!!

巨大なコンクリートの塊が飛んできた。

「……オフエンスアーマー窒素装甲か。面倒だな」

その直後、無限物質は姿を消し、絹旗最愛の目の前に現れた。

「………!?!」

「死にたまえよ」

絹旗の窒素の壁を突き破るほどの何かが襲いかかる。

暴発、原子崩しへメルトダウン！

浜面が盲点検査インプラインドの少女と対峙しているまさに同時刻、麦野沈利とフレンドは圧倒的な実力差で追いこまれていた。

麦野沈利は原子崩しメルトダウンを所有する学園都市で4番目に強い超能力者である。基本的な戦闘能力はもちろん、場数も多くこなし、視線だつて何度もくぐり、『アイテム』のリーダーとしての信頼も厚い。

それほどの人物が追い込まれる場合、必ず理由がある。少なくとも、相手はレベル5ではない。レベル5でない以上、麦野沈利レベル5が負ける筈はない。

それを、麦野もフレンドも確信していた。

だが、能力には相性がある。

「残念ね、麦野さん。レベル5じゃ、私には勝てないのよ。第1位と第2位は別格だけど」

発火能力は水流操作ハイドロハンドに弱い。幻想殺しイマジンプレイカーは異能の力に強い（これは例外？）。

能力には相性があるのだ。

「くそ！なんでだ！！」

麦野が放つ原子崩しメルトダウンはことごとく相手を避けていく。

攻撃が当たらない。相手は自分と同じくらいの少女だ。体格的なハンデもないし、能力も間違はなく自分の方が上。

様々な要素が余計に麦野の集中力を削っていく。

「ほらほら、どんな攻撃も、当たらなければ意味がないわよ」

「なんで当たらないんだ！くそ！」

「そうね……、身近に似た奴がいる、とでも言えば分かるかしら。

あとは“体晶”っていわば分かるかでしょう？」

「なっ……」

聞きなれない単語だが、麦野はそれをよく知っていた。

同じアイテムのメンバー、滝壺理后が使用する薬物だ。

能力の暴走を誘発し、普通では出せないレベルまで能力を向上させるが、正体不明な分、使用者にかかる負担も大きい危険な代物である。

「AIMストーカー能力追跡が同じ物使ってるよね。これ」

「テメエ……ッ、なんでそれを持つてる……！？」

「簡単よ、アタシも同じなの。体晶による能力の暴走の誘発によって、通常以上の力を発現させる。アタシは基本は強能力者程度よ。レベル3

それが、この体晶のおかげで大能力者以上の力を発揮できる。アタシの能力は、まあ『AIMアナライザー能力解析』レベル4とでも言ったところかしら。中には

『AIMハッカー能力剥奪』レベル4って言う人もいるけど」

麦野は滝壺の能力をよく知っている。

相手のAIM拡散力場に干渉して居場所を突き止める滝壺は、全力を出せばそれを応用して相手の能力を乗っ取ることも可能とされている。

この女の能力の『AEMアナライザー能力解析』という響きから、滝壺と似たような能力であることは容易に推測できる。
つまり、第4位の能力は、

「テメエに乗っ取られてんのか……！」

「そういうことよ。アタシは相手の能力が強ければ強いほど乗っ取ることが容易になる。第1位や第2位みたいな複雑な演算はできないけど、電子制御系の能力なら乗っ取ることくらい容易いのよ」

麦野は再び女に向けて原子崩しを放つが、それは相手には当たらずに明後日の方向へ飛んでいく。メルトタワー

「能力を乗っ取るっていうなら……！」

「能力を使わずにふっ飛ばせばいいわけよ……！」

突如、フレンドが背後から爆弾人形を持って飛びかかるが、

「分かってないわね、貴女達」

爆弾が爆発する前に女がフレンドの腹に手を触れると、ゴッ……！という音とともにフレンドは数メートル吹っ飛ぶ。

「AEMアナライザーアタシの能力解析で乗っ取れるのは貴女達の能力だけじゃない。オフエンスアーマーこんな風に窒素装甲を奪い取って使うこともできるのよ」

女は絹旗最愛の窒素装甲オフエンスアーマーを行使してフレンドを吹っ飛ばしたのだ。

「くっ……！」

「それじゃあ悪いけど、自分の能力で死んでもらえるかしら」

「くっそおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

麦野は闇雲に原子崩しを放つが、その全てが女を避けていく。

「どの道貴女じゃ勝てないのよ。勝ちたければ第1位か第2位でも連れてきなさい」

女は麦野から奪った原子崩しを麦野の顔の前で発動させ、麦野をッ府飛ばそうとするが、

「テメエを止められるのが第1位か第2位だって言うなら、そいつを連れてきちまえばいいんだろ」

突如、^{メルトタワー}原子崩しは空中分解し、消えてしまう。

「なんで……ッ！」

「簡単だ。原子を動かして飛ばしてるなら、そこに異物を組み込んで計算式を崩しちまえばいい」

突然現れた第2位のメルヘン野郎は、異物の混ざった日光を女に向かって放つが、ギリギリで避けられる。

「この……、メルヘン野郎！」

「心配するな、自覚はある」

AI Mアナライザー
能力解析で乗っ取れない能力者のうちの一人、垣根帝督は、そこに
いた。

瀕死、窒素装甲へオフエンスアーマー

それは炭素の塊だった。

無限物質は手のひらから炭素の塊を出し、それを絹旗に向かって槍のように突いた。

「ぐ……は……っ！」

「絹旗！！！」

それは絹旗の脇腹を貫いた。

「オフエンスアーマー窒素装甲つてのは窒素を操る能力なんだろう？ だったらお前の周囲を窒素以外の気体で満たして窒素をどかしたうえで、さらに攻撃を仕掛けてやればいい」

槍のように突き出された『それ』は、分かりやすく言えば『ダイヤモンド』である。

既存の物質を自在に生み出す能力者である無限物質は、やろうと思えばダイヤモンドだろうが水晶だろうがどんな物でも生み出すことが可能。

限りなく硬い物質で相手を貫くことも容易かった。

無限物質は生み出したダイヤモンドの槍を分解し、絹旗が倒れこむ前に蹴り飛ばす。

「絹旗！ おい絹旗！」

「かりそめ、動かさないほうがいい！」

京谷と滝壺は絹旗に駆け寄り声をかけるが、絹旗からの反応はない。ただ、脇腹から赤い血を流してぐったりとしているだけで、何の反応もない。

「……おい！おい！」

「……大丈夫、まだ生きてる」

「本当か！？」

「うん、まだ絹旗の体から、AIM拡散力場が発生してる。まだ生きてる証拠」

滝壺は絹旗の体からまだAIM拡散力場が発せられていることを確認し、京谷に伝える。

それと同時に、滝壺の考えが京谷にも伝わった。

「……逃げの一手ってカツコ悪いけど……それしかないよな」

京谷は絹旗と滝壺を連れてその場からテレポートする。

「あ！待てコラ！」

それを直前に気付いた無限物質が止めようとするが間に会う訳もなく逃げられてしまう。

「クソ！ド畜生！逃げた空間移動能力者なんか追えるかよ！」

まるで子供のように地団太を踏んでわめく無限物質。
その度に様々の物質が辺りに飛び散る。

「クソウ……探し出して殺す！『スペード』が本気になれば、第8位程度なんざ簡単に殺せるんだよおおおお！！」

「そうかよ。じゃあ、俺が相手だ」

無限物質の咆哮に答えるかのように言った少年は、

「テメエ、ただの無能力者の男か……！！」

「ああ、そういやあのガキはアンタの連れか？案外簡単に倒せたぞ」
浜面仕上。

ただの無能力者の元不良少年は、第6位に向かって喧嘩を売った。

「優衣に勝ったのか……。無能力者如きがかあ！！」

「イラつくんなら殺せよ。怪我してる女の子を蹴るような奴には死んでも負けねえけどな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4728y/>

とある科学の超越移動《オーバーポイント》

2012年1月6日23時49分発行